

『高王觀世音經』の原初テキストについて

——南北朝から隋唐の諸本の比較検討から——

山崎 順平

はじめに

『高王觀世音經』（以下高王經）は読誦千遍により救済を得ると説く中国撰述經典である。東魏の宰相高歡に因む広験が經名の由来とされ、南北朝以降庶民の觀音信仰に大きな影響を与え続け、大正藏にも所収されるに至っている。仏名經に類した仏名の羅列が特徴で、それら仏名や經文の一部は様々な經典から抜粋されたものである。

41 『高王觀世音經』の原初テキストについて（山崎）
本經の成立年代や制作意図を考える上では撰述当初のテキストを明確にする必要がある。牧田（一九六七）が出口常順氏藏トルファン出土仏典断片『仏説觀世音折刀除罪經』（以下トルファン本）を高王經の古本として紹介したのを皮切りに、これまで大正藏本と異なる古いテキストが次々と発掘されてきた。しかしその研究の多くは新資料の紹介と既知のテキストとの比較であるが、①早く牧田（一九六

七）が存在を指摘し桐谷（一九九〇）が録文を紹介した敦煌文書 P3920 所収本（以下 P3920 本）が、大正藏本に近く、唐代の古本に仏名や經文の大きな増広を加えたものであること、②東魏武定八年（五五〇年）の題記を有し有紀年本としては最古の「杜文雅十四人等造像碑」所刻「高王經一卷」（以下東魏本）が、後述の通り校勘が杜撰なテキストであること、の二点が災いし、南北朝に撰述された本来の姿をつかみ切れぬまま、今日を迎えていると言える。

それ以上に見逃せない点は、先行研究が「十句觀音經」（以下十句經）等との関係に目を奪われている点である。

桐谷（一九九〇）は高王經の形成と展開を論じる重要な論文であり、まず後述する房山石經の二刻經・トルファン本・P3920 本・大正藏本の録文を紹介して比較する。しかしこれら増広傾向の高王經系統と、それとは別に、同時期に同じく読誦千遍の功德の傳承を持ち類似の表現を含む縮

約された十句経系統との、二系統の存在を示し、更に兩者の主要部位からなる原高王経は、兩者と共通の表現を持つ敦煌文書 S.456 『救苦觀世音經』（以下救苦経）を源流にすると論じたのである。田村（二〇一一）は類似関係を精査して救苦経を十句経の系譜に位置づけつつ、北斉のものとなしうるアジア美術館収蔵の造像碑の上に、高王経（刻経 C）と救苦経の原初形と思われる簡潔な經典（刻経 B）の二種の『仏説觀世音經』が共に刻まれていることから、十句経の更なる源流として刻経 B をとらえ、同時に高王経との密接な繋がりを論じて桐谷の見通しを補強する。

しかし高王経が直接觀世音菩薩への帰依を説かないのに対し、十句経は常に觀世音を念ずることを説く経であり、更に救苦経には両経にない地獄における救済が説かれており、内容面からすれば、救苦経が両経の、あるいは十句経の源流だとの説は到底承服しかねるものである。

本稿は、他経との影響関係はひとまず置き、唐代以前とされる諸本を比較検討して後世の変質や増広を捨象し、高王経の撰述当初の形態を追究するものである。

尚録文は字形、改行位置を含め、なるべく原資料の形態を残すように心がけた。囲み文字は判読困難、？は筆面の欠落などによる判読不能、□は欠字、* **等は字形の注釈を下に記した。丸番号の付された傍線部は録文についての

説明（行論上順不同の箇所あり）に対応する。波線部は他本とのその他の異同。また各本の仏名・経字数の増減を確認するため、経文字数と仏名数を各本表題下に明示した。

- 1 東魏本（表 1） 東魏武定八年（五五〇年）杜文雅十人等造像碑刻『高王経一卷』完本 経字数 249・仏名数 17 高さ一七五 cm 幅三九 cm 厚二三 cm の四面に開龕し造像された造像碑で、禹州出土とされる。高王経以外の録文は北村（二〇〇八）に詳しい。碑陽には二段の龕があり、その下部に典雅な楷書による題記⁹があつて、冒頭に「大魏武定八年歲次庚午二月」と記す。碑の両側には三段の龕があり、左右に供養文が拙い字で刻され、右側下部には供養する四人の名が題記と同様の字体で刻まれている。碑陰にも二段の龕があり、左右にはやはり供養文が拙い字で刻まれている。問題の高王経はこの龕の下部にある。字体は題記とほぼ同じである。しかし他本と比べると、文字の異同が多く、保存状態が悪いのか、拓本に判読できない部分が多い。
- ③ 「婁樂我縁」の「婁」
「龍門老龍洞本」を除いて他本は全て「常樂我縁」である。該本が「婁」に作る理由は不明。
- ④ 「南無」という語の四カ所
下の方にある二カ所が「男无」となっている点が問題と

(表1) 東魏本① 高王経* 卷

佛説観世音経一卷讀誦千遍渡苦難除生死罪觀世

音菩薩南无佛佛口口緣佛法相因哀樂我緣佛説男无摩

訶波若是大神?口口摩訶口若是大神呪男无摩訶波若

是大明呪南无摩訶波若是无等々呪觀光悲願佛法口佛

師子吼神足遊王佛告耳弥登王護法護佛金口師子遊戲

佛藥師留觀光佛普光攻德山王佛護治攻德?王佛口方

方皇王神通艷花王佛北方月擊清影佛上方無數??寶

佛下方善治月音王佛羅迦牟尼佛迦勒佛中央一切呪

生俱在法戒中者行動於地上口以虛空里慈憂於一切寧

可安休息晝夜脩其心常口口此呪口口於毒害

(*経)

(*在)

なる。帰依を表す音訳語「南無」が「男」字を用いて訳される例は管見では見当たらない。また繰り返される「南無摩訶般若是く呪」句中、順に「男无」、判別不能、「男无」、「南无」となり、統一されていない。伝承した人物が意味を理解せず、音のみを頼りに記録したとしか考えられない。

⑦「法戒」という語

該傍線部の出典は『仏説除恐災患経』。本来「土界」であり、他本のほとんどが「土界」と作る。衆生が保持すべ

き菩薩戒を念頭にした、該本固有の変質と考えられる。

⑤「摩訶般若是く呪」の形で繰り返される部分

「大神呪」、「大神呪」、「大明呪」、「无等々呪」の三種四回に作る。般若諸経ではこの部分はマントラとしての「般若波羅蜜多」の三ないし四種の名を併記し、同じ名を繰返す例はない。最初二つが同じ「大神呪」である点が、それらの表現とは明らかに違い、合理的な説明が困難である。

一方、当時存在した羅什訳「摩訶般若波羅蜜大明呪経」(大正藏第8冊八四七頁c)と「摩訶般若波羅蜜経」(卷九・勸持品(同二八六頁c))は共に「般若波羅蜜是大明呪、無上明呪、無等等明呪。」と作り、「南無摩訶般若波羅蜜」の繰返しや「大神呪」はなく、逆に該本には「無上明呪」がない。また「無等等」後も表現が食い違う。同じく羅什訳「小品般若波羅蜜経」(卷二・塔品)では「般若波羅蜜是大明呪、般若波羅蜜は無上呪、般若波羅蜜は無等等呪。」(同五四三頁b)と作り、「般若波羅蜜」の繰返しがあつて「無等等呪」と作る点は該本に近いが、三種それぞれに「南無摩訶」はなく「大神呪」も見えない。しかし後述のアジア美術館本や房山雷音洞本を併せて考えると、これらは本来のテキストにすであつたものであろうと考えられる。

①経題の「経」字

経題の字形が本文第一行のものと異なるため、「高王経」

という経題の後付けが疑われている。⁽³⁾しかし経中の「無」字が本文二行目から四行目にかけて「无」に作る一方、八行目では「無」に作り、さらに④における別字の混用を見ると、そのみを根拠に補刻と考えるのは性急である。

② 「觀」字の字形（「觀」字体）

この字体が北魏初期から広く用いられながら、隋以降ではほとんど例がないものであることが、京都大学人文科学研究所拓本データベース（以下拓本DB）や漢字字体規範データベース（以下HNG）から確認できる。「觀」字の字体は、管見によれば、後漢・三国魏の隸書ではほとんどが「觀」であったものが、北魏では楷書化する中で、両者が混交した字体（「觀」や「觀」）を経て「觀」（以下「觀」字体と略記）となった。それが隸書復古の流れで北齊あたりから再び「觀」字体や両者が混交した字体が現れ始め、隋唐では「觀」や「觀」そして「觀」（以下「觀」字体と略記）に定着する。敦煌文書S388所収の字様書『正名要録』（隋末唐初のもの⁽⁴⁾と推定⁽⁵⁾）は「不須卅」（卅ではない）と注して「觀」を正字とし、既に「觀」字体を前提とする。

● 該本と題記との関係

この造像碑には前述の通り東魏武定八年（五五〇年）の銘があるが、題記に経のことは触れられておらず、題記と同時に高王経が刻まれたものかは疑いが残る。一見すると

同字形の如くに見えるが、詳細に検討すると、題記の「等」字の「寸」上の「ソ」状の筆法、「墟」字の旁や「虚」字中央の「井」状の筆法が、高王経の「等」字あるいは「戲」字の旁や「虚」字とでは微妙に異なっている（図1）⁽⁶⁾。高王経全体の石刻時期が題記より下る可能性もあろう。

③ 「在」

この「在」という字体は、拓本DBで見える限り、洛陽龍門薬方洞の普泰二年（五三二年）銘「北魏清士路僧妙釋迦造像記」に一例見えるのみの珍しい字体であり、年代判定の根拠にはならない。

④ 「中央」

該本、後述の房山雷音洞本、Kx01592本のみに見える。



図1 題記と高王経の字形の違い

◎ まとめ

③④⑤⑦の如く、本来の文字から俗訛したと思われる箇所が多い。杜撰な本である。題記以後に石刻

された可能性があるが、②から隋以降に下る事はなからう。

2 アジア美術館本（表2） サンフランシスコ・アジア美術館所蔵経碑刻『佛説観世音經一卷』（刻経C）¹⁹ 無紀年・末尾（最大四字）は補修により欠 経字数298・仏名数22 李玉珉（二〇〇二）、劉（二〇〇六）、張総（二〇〇六）が言及し、田村（二〇一一）により録文が紹介された文献。

（表2）アジア美術館本

佛説観世音經一卷

佛説観世音經讀誦千遍得度苦難^②除生死罪^①觀世音菩薩南无

佛佛國有緣佛法相^③常樂我緣^②佛説摩訶般若是大神呪南无摩

訶般若是大神呪南无摩訶般若是大明呪南无摩訶般若是大无

等呪淨光秘密佛法藏佛師子吼神足^④王佛告須弥登王佛法

護佛金剛師子^⑤戲佛栗師^⑥璠光佛普光功德山王佛善住功德

寶王佛六方六佛名号東方寶光月殿妙尊音王佛南方樹根花王

佛西方皇王神通艶花佛北方月殿清淨佛上方无数精進寶音佛

下方善^⑦月音王佛^⑧迦^⑨尼佛^⑩弥勒佛東方快樂佛月明^⑪住王

佛過去堅持佛分別七淨佛妙法蓮華花上王佛令一切衆生^⑫在

王界中者住於地上者及以^⑬空中慈愛於一切令各安^⑭息晝夜

倍慈心常念誦此偈消伏於毒害常夜半起三稱六方六佛名字永

〔三〕途八難之處上衆法堂快（□□□□）

碑は高さ一四八cm幅七一cm厚さ約八cmで碑陽の上部には交龍の下に、菩薩像を本尊とし左右に比丘・菩薩・力士を配した七尊像があり、その下部には中央に香炉とそれを支える二人の力士、左右に供養人・樹木・師子が配された横長の龕が穿たれている。碑陰全面に『妙法蓮華經』（以下妙法華）観世音菩薩普門品（以下普門品）（刻経A）が刻され、碑の左側から碑陽の図像の下部にかけて別本の『仏説観世音經』（刻経B）があり、その後に該本が同じく『仏説観世音經』と題されて刻され、最後に『仏説天公經』（刻経D）が刻される。該本以外の録文は田村（二〇一一）を参照。碑陽の左、石幅の四分の一度度は余白であり、題記や供養文は見られず無紀年である。

田村氏は図像・刻字に北斉の特徴が現れるとして北斉のものとする。また碑陰の普門品が「第廿四」で重誦偈がない本であることから、隋の添品以前の古本であり、現存する添品の最古の本は房山雷音洞の妙法華であるとして、この碑が北斉のものであるとの判断の補強としている²⁰。張総氏は刻字・造像とも北斉の風格があるとしながらも、北京大学図書館善本室に収蔵されている旧繆荃孫芸風堂蔵の碑陽の拓本の解題に「碑後具有隋開皇八年題記」と記されていることを紹介し、年代の判断を保留する²¹。

尚東魏本より仏名が五仏、経字数が約四〇字多い点が注

目される。これは特に⑤⑦の部分であり、私見を後述した。

②「佛説」から「摩訶般若是…呪」で繰り返される部分

まず、「大神呪」が二回繰り返されるのは東魏本と同様であるが、一回目の表現には「南无」がない。このことから、仏が「摩訶般若」を「大神呪」であると説いたことを受け、「大神呪」「大明呪」「大无等等呪」という三種のマントラ名を持つ「摩訶般若」に帰依するものと読める。

次に「無等等呪」に「大」字が冠する点が問題となる。般若諸経漢訳・梵文に「大無等等呪」と作るものはないため、撰述当初にはなく伝承の中で付け加わった衍字の如くに思えてしまう。しかし、後述の房山雷音洞本にも「等等呪」の前には明らかに「大」字があり、トルファン本は全体の字体からやや時代が下ると思われるが、最初の表現に「南无」がない点も含め、該本と一致している。このことから、やはり経文の撰述当初の形は該本の形であり、伝承の中で「摩訶般若是大神呪」という表現が繰り返されるのが衍字と考えられ、更に「大無等等呪」の「大」が他に見えないことから衍字とされて脱落し、「南无摩訶般若是大神呪、南无…是大明呪、南无…是无等等呪」と作ったのである。更に時代が下ると「摩訶般若」に「波羅蜜」を附加する本（後述の房山第三洞本他）が生じたと思われる。

③「金剛師子遊戲佛」という仏名

龍門老龍洞本以降の諸本は「金剛藏師子遊戲佛」。但し

トルファン本のみ「金剛師子吼遊戲佛」に作る。依拠する經典は曇無竭訳「觀世音菩薩授記經」で、大正藏本は「金光師子遊戲佛」と作るが、該本の仏名が本来の形であろう。

⑥「玉界」

東魏本⑦で既述。尚この「玉」という字体は、「土」字との区別から既に後漢から行われていた。

④「冢」字体の「寂」字

HNGに基づく池田証寿(二〇一〇)は「南北朝・隋の字体」であるという。藤枝(二〇〇五)八〇頁もトルファン写本中のこの字体に言及し、高昌国期の延昌三七年(五九七年)の写本との書法の類似性に触れながら「当時の通用体」と述べる。拓本DBで確認すると、南北朝でも主流は「瘞」で全体52例中79%の41例、「冢」は15%の8例あった。隋代では31例中「瘞」は71%の22例、「冢」は3.2%の房山仏経残石1例のみ。唐代では262例中「瘞」は68%の187例、「冢」は0.8%、大像邑之碑に2例のみであった。前掲の字樣書『正名要録』は「冢」を「古而典」(古く規範的な字体)、「瘞」を「今而要」(今の簡潔な字体)とする。

①「觀」字体の「觀」字

東魏本②参照。隸書的な筆法も見られず、北齊以前の石刻であることが推察できる。

⑤「東方快樂佛、…妙法蓮華花上王佛」の五仏名

⑦「常夜半起、三稱六方六佛名字…」の滅罪法

この二箇所は東魏本、後述の隋唐諸本、大正蔵本を含む宋代以降の諸本にもない。⑤に全く一致する仏名は他の經典には見出せない。また⑦は大正蔵本にまで一貫して見える「六方六佛名号」に関わる滅罪法だが、現存他經典には見えない。後述隋唐諸本にはほとんど經文や仏名の増減が見られず、一定のテキストとして普及していたと考えられる。したがって該本のこれらの表現は、高王經撰述当初の形の残存と見ることしかできないのではないだろうか。

●古本普門品の年代下限について

鳩摩羅什訳の妙法華は本来「提婆達多品」(以下提婆品)と普門品重誦偈が欠けた二十七品本であり、闍那崛多・達摩笈多訳「添品妙法華經」が仁壽元年(六〇一年)に現れる頃までには、提婆品が竺法護訳「正法華經」の順序にない第十二品に挿入普門品に重誦偈が附加され、現行本の二十八品が成立したとされる。然るに該碑普門品は「第廿四」となる無重誦偈本のため、田村氏の検討の通り、提婆品附加以前の古本と考えられる。この提婆品附加が行われたのかを確認することは、該普門品本の年代下限、

ひいてはアジア美術館本の遡及可能性にも関係する。本題からは逸れるが、以下詳しい検討を行おう。

兜木(一九七八)三七八頁は、提婆品の訳者について『歴代三寶記』(大正蔵第49冊九五頁b)の法意訳説・智顛『妙法蓮華經文句』の鳩摩羅什訳説・吉藏『法華義疏』及び窺基『法華玄贊』の真諦訳説の三説があるとした上で、法獻が于闐国で梵本を入手し永明年中(四八三〜九三)に揚州瓦官寺で法意が訳したとする第一の説を採る。真諦訳説が成立しない反例として、兜木氏は普門品を第二十五とする『敦煌劫余録』位四(第四冊三四五頁)の「正光三年翟安德写」題記を挙げる。北魏正光三年は五二二年にあたる一方、真諦が渡来したのは五四六年であるためだが、残念ながらその題記は未見である。もともと『統高僧伝』真諦伝には提婆品訳出の記載はなく經録にも見えないため、その真偽は疑念が持たれており、布施(一九三五)は訳語の比較により提婆品が真諦訳ではないことを論証している。

振り返ると兜木氏が挙げた『歴代三寶記』は、道慧の『宋齊録』に見えると注記するが、觀世音懺悔除罪呪經一卷と合わせて二巻と記録され、法意本を妙法蓮とは別個に扱おう。『出三藏記集』巻二でも「…先師(猷正)至高昌郡、於彼獲本、仍寫還京都。今別為一卷。」(大正蔵第55冊一三頁b)と記し、この本をはっきりと別行本であるとする。

一方兜木氏が挙げた吉藏『法華義疏』序品は、

後更有提婆達多品者、釋道慧『宋齊錄』云、「上定林寺釋法獻於于闐國得此一品、瓦官寺沙門釋法意以齊永明八年十二月譯出為提婆達多品經」。未安法華內。

梁末有：真諦。又翻出此品、始安見寶塔品後也。」（後に更に提婆達多品があるのは、道慧『宋齊錄』に、「上定林寺の法獻が于闐國でこの品の梵本を入手し、瓦官寺の法意が南齊永明八年十二月に訳出して提婆達多品經としたのだ」という。が、まだ妙法蓮華經には挿入されていなかった。梁末に：真諦：がまたこの品を訳出し、初めて見寶塔品の後に挿入したのだ。）

（大正藏第34冊四五二頁a18～24）

とし、『歷代三寶紀』が依拠した『宋齊錄』の記載を引用した上で、法意本は妙法華に挿入されず、妙法華挿入の提婆品は真諦訳だとする。『法華義疏』説は法意本の存在を認めつつそれは別行本だとし、二經録と合致するのである。

その正しさは以下からも確認できる。光宅寺法雲『法華義記』には提婆品がなく、彼が用いた妙法華は二十七品本であることが知られている。この書は弟子の講義録であり、その書写年代は明確ではない。しかし肩書を「光宅寺沙門」とするため光宅寺で活動した期間の講義録と考えて

よい。その期間は、梁武帝の勅命を受け家僧となり光宅寺に入った天監七年（五〇八年）から卒する大通三年（五二九年）までで、その間武帝に重用されたため、提婆品挿入の妙法華が存在すればそれを用いないはずはない。従ってこの間建康に二十八品本妙法華がなかったことは確実である。

智顛『妙法蓮華經文句』に陳の慧思が提婆品挿入の妙法華を用いたと記す点も併せて考えると、『法華義疏』説のうち、提婆品挿入が梁末に行われたとする点は事実としてもよいのではなからうか。

以上の検討をまとめると、梁末すなわち太平二年（五五七年）には提婆品が挿入され普門品が第二十五となる現行本が普及を始めたことになる。勿論、原典が多数存在するためその後写本が全て現行本とは限らないが、これが該碑石刻の祖本である古本普門品の年代下限の目安とならう。

◎まとめ

- ① ② 三種のマントラ名を繰返す部分に「大神呪」が二回繰り返されるが、一回目の表現には「南无」がなく、二回繰返す理由が整合的に説明できる。また最後の「无等等呪」に「大」字を冠する形が撰述当初のものと思われる。
- ② ③ 「金剛師子遊戲佛」という仏名や⑥ 「土界」という表現が、依拠する經典の本来の形を伝えている。

(3) ①④の如く、該本には「観」字体の「観」字や「冢」字体の「寂」字など、南北朝時代の字体が用いられている。
 (4) 該本のみに見える、⑤「東方快樂佛」以下の五仏名や⑦「六方六佛名号」に関わる滅罪法が、撰述当初の形以外には考えにくい。

(5) 共に刻まれた観世音菩薩普門品が提婆達多品の挿入される梁の末年の太平二年(五五七年)以前の形を保つ。

以上五点から、該本の石刻年代は北魏後期を含む南北朝時代に遡れ、テキストとしても東魏本より本来の形を保つと考えられる。

3 房山雷音洞本(表3) 房山雷音洞「大王観世音経一卷」
 無紀年・末尾摩滅
 経字数240・仏名数17

(表3) 房山雷音洞本	已下大王観世音経一卷
①説観世音経一卷	□誦千遍得度
②樂我縁	佛□□□□詞波若是大神呪
□等等呪	□秘密佛
師子遊戯佛	藥師瑠璃佛
方寶光月	妙尊音王佛
上方无	□精進寶
□界中者	行住於地上
□□	(最終行摩滅)

桐谷(一九八七)によると、雷音洞は静苑により隋の大業年間(六〇五〜六一七年)に創業され、貞観二年(六二八年)に完成したとされる。本経は西壁上部に向かって左側、鳩摩羅什訳「仏臨涅槃略説教戒経」第三石の余白に刻され、さらに左側には南齊・曇摩伽陀耶舍訳「無量義経」德行品偈と北涼・曇無讖訳「大般涅槃経」如来性品偈が刻された石が並んでいた。上部と最終行は東壁の入り口からの風砂の影響か摩滅が激しく判読できない。

②「佛(説)」から「(南无摩) 詞波若是…呪」の繰返し欠字があるが、最初の四字は右記の如く「南无」を、下の欠字は「无」がそれぞれ補える。「佛説」後に「南无」のない「摩訶波若是大神呪」のあったアジア美術館本とは明らかに異なり、その部分が欠落し、「大神呪」、「大明呪」

「大(无) 等等呪」の三種のマントラに帰依する形のみである。また「(无) 等等」の上に「大」字があり、やはり諸般若経典とは明らかに異なる表現である。

- ③ 「金剛師子遊戯佛」
- アジヤ美術館本③と同様。
- ⑥ 「此□界」

桐谷(一九九〇)、張絵(二〇一〇)、田村(二〇一一)は皆「此世界」と釈読する

(※ 芥)

5 房山第三洞本 (表5) 房山第三洞内、易州涑水県令

(表5) 房山第三洞本
 佛説觀世音經一卷 讀誦千遍得度
 苦難除生死罪
 觀世音菩薩南無佛國有緣佛法相
 因常樂我緣佛説南無摩訶般若波羅
 蜜是大神呪南無摩訶般若波羅蜜是
 大明呪南無摩訶般若波羅蜜是无量
 等呪淨光秘密佛法觀佛師子神足
 幽王佛告須弥登王佛法護佛金剛藏
 師子遊戲佛藥師瑠璃光佛普光功德
 山王佛善住功德寶王佛六方六佛名
 号東方寶光月殿妙尊音王佛南方樹
 根華王佛西方造神通聖華王佛
 方月殿清淨佛上方无数精進首佛
 下方善觀月音王佛釋迦牟尼佛弥勒
 佛中央一切衆生在於三界中者行着
 於地上及以虚空裏慈護於一切令各
 安隱休息晝夜脩治心常應誦念此偈
 消伏於毒害 佛説高王觀世音經
 易州涑水縣令潘彥真合家供養
 (* 芥 * 士)

潘彥真刻「佛説觀世音經一卷」完本

經字数251・仏名数17

同石上には第一段に麟徳二年(六六五年)銘「四分戒本」の末尾、第二段に総章二年(六六九年)銘「般若波羅蜜多心経」、第三段が該本、第四段に供養の沙弥僧・童子名が、それぞれ刻されており、六六九年以降のそれほど遅れない時期に刻されたものと考えられる(桐谷(一九九〇)八頁)。
 ②「南無摩訶般若波羅蜜是：呪」の繰返し
 房山雷音洞本と同様三種併記ではあるが、第二種が玄奘訳「般若心経」と同様の「无等等呪」と

作る点、「般若」を「般若波羅蜜」と作る点、隋にはない新しい形である。

③「金剛藏師子遊戲佛」アジア美術館本③参照。

④「土界」アジア美術館本⑥参照。

①「観」字体の「観」字 全て明瞭な「観」字体である。

⑤「晝夜脩治心」

「治」字を東魏本は「其」、アジア美術館本は「慈」に作るが、房山雷音洞本以降の諸本は皆「治」に作り、「治」字に定着したことが分かる。李小栄(二〇〇三)は唐高宗の諱を避けていないとして該本を隋末唐初の石刻とするが、上段に刻された麟徳二年(六六五年)銘「四分戒本」も高宗在位中に関わらず「治」字を用いており、その説は当たらない。

6 コロンビア大学本(表6) コロンビア大学所蔵サツクラウ菟集造像碑刻「佛説觀世音經一卷」無紀年
 經字数232程度・仏名数17

碑陽には三尊像と五尊像の大小二つの龕があり、以下に祈願文が刻される。碑陰の上部には地藏菩薩を中心とする九つの龕がありその下に仏涅槃を示す図像、一番下に該本が刻される。張総(二〇一〇)が唐代のものとして紹介している。下部が五から六字分失われ欠字となる。

(表6) コロンビア大学本

佛説觀世音經一卷讀誦千遍得度□□□□□□□□□□

觀世音菩薩南无佛佛國有緣佛法相□□□□□□□□□□

說南无摩訶般若是大神呪南无摩□□□□□□□□□□

呪南无摩訶般若是无等等呪淨光□□□□□□□□□□

師子吼神足國王佛高須弥登王佛法□□□□□□□□□□

師子遊戯佛藥師 流璃光佛普光□□□□□□□□□□

功德寶王佛六方六佛名號東方寶□□□□□□□□□□

王佛西方造王神通焰華王佛北方月□□□□□□□□□□

无数精進寶首佛下方善觀月音□□□□□□□□□□

尼佛弥勒佛一切眾生在於土界中者□□□□□□□□□□

虛空裏慈憂於一切令各安 隱休息□□□□□□□□□□

應誦此偈消伏於毒害 高王觀□□□□□□□□□□

淨妙寺比丘尼靜意為亡闍黎及亡父□□□□□□□□□□

經一卷願生西方極樂國土童□□□□□□□□□□

生同登此福 (※)

可。

②「東方寶□□□□□□王佛」

他本は「東方寶光月殿妙尊音王佛、南方樹根花王佛」と作り、字数から「南方樹根花王佛」が欠落すると思われる。

③「土界」 東魏本⑦参照。

④「觀」字体の「觀」字「觀」字体が明瞭に確認可。

①まとめ

①「南无摩訶般若是：呪」の繰返し

第二種が欠字で不明であるが、三種併

記。「波羅蜜」の追記はない

が、第三種が「无等等呪」と作る点は房

山第三洞本と同様で、唐代

に入つてからものと推測

のもの

①④より書写年代は初唐以降であろう。(40)

7 トルファン本(表7) 出口常順氏蔵トルファン出土 仏典断片「佛説觀世音折刀除罪經」(無紀年・尾欠本)

經字数 196 / 192・仏名数 16 / 15

藤枝(二〇〇五) 一三一―三頁。唐代写本の章に含めるが、書写年代を特に明示しない。牧田(一九六七) 二八三

頁は特に根拠を示さず

に書写年代を八世紀と推定と記す。下部

部が卷いた状態で失われ波状に欠字となる。尾部も欠失。

②「佛説」から「摩訶般若是：呪」の繰返し部分

「大神呪」が二回繰返し返される点、一回目の表現には「南

无」がない点、更に最後の「无等等呪」に「大」という字が

(表7)「トルファン本」

(仏説寶車菩薩經に続き)

佛説觀世音折刀除罪經

佛説觀世音經讀誦千遍得度苦難除生

罪觀世音菩薩南无佛佛法有緣國□□□□

常樂國緣佛説摩訶般若是大神□□□□

觀般若是大神呪南无摩訶般若是大明呪

南无摩訶般若是大无等等呪淨光□□□□

法藏佛師子吼神足國王佛高須弥□□□□

法護佛金剛師子吼遊戯佛藥師流離光佛

自在王佛普光功德山王佛善住功德□□□□

四方□名號東方寶光月殿妙觀□□□□

方樹根華王佛西方造王神通炎華王佛西方

月殿清□□□上方无数精進寶□□□□

□音寂月音(以下略) (※)

冠されている点の全てが、アジア美術館本と共通する。

③ 「金剛師子吼遊戯佛」

「金剛」後に「藏」がない点は、房山雷音洞本以前と共通。

「師子吼」と作るのはいかにない。出典を踏まえると誤記と考えるのが適当であろう。

④ 「自在王佛」

大正蔵本までを通じ、該本のみに見える仏名。北魏吉迦夜あるいは羅什訳とされる『仏説称揚諸仏功德経』(大正蔵第14九八頁a)と北涼曇無讖訳『大方等大集経』卷七(同第13冊四四頁b)に見える。隋代以降には僅かに隋闍那崛多訳『無所有菩薩経』卷三(大正蔵第14冊六八七頁a)に見えるが、無所有菩薩の本土譚が中心で、取えて該仏名のみを追加する理由がない。アジア美術館本には見えないが、撰述当初に存在した仏名と考えるのが適当であろう。

① 「観」(「観」)字体の「観」字

隋代の房山雷音洞本を受けた字体である。

⑤ 「豕」字体の「寂」字

隋以前の字体である点はアジア美術館本④参照。

⑥ まとめ

八世紀とされるが、内容や字体ともに隋代の様相を示す。アジア美術館本との共通点が多く、同系統であろう。④の

仏名は他本にないが、撰述当初の表現の残存と考えられる。

8 Jx00531本(表8) ロシア科学院東方研究所サンクトペテルブルク分所蔵敦煌文書 Jx00531 『佛説観世音経』無紀年・尾欠本 経字数183/186・仏名数15/14

首題は欠失。後半も破損欠失。

① 「南无：呪」の繰返し 房山第三洞本と同形。

② 「寶勝佛」

「金剛蔵師子遊戯佛」後に該仏名を作る本は該本以前にはない。該仏名は、曇無讖訳『金光明経』卷四「流水長者子品」に見える(大正蔵第16冊三五三頁)が、そこでは釈迦牟尼仏の本生たる流水長者子が話柄の中心であり、仏名が信仰対象となるのは唐以降である。後述の甘肅省水城諸本や P3920

(表8) Jx00531本

〔説〕観世音経一卷受持讀誦千遍得度苦

觀世音菩薩南无佛佛國有緣佛法相因

常樂我緣佛說〔南无摩訶波若波羅蜜

是大神呪南无摩訶波若波羅蜜是大明呪

南无摩訶波若波羅蜜是无等呪靜光秘

蜜佛法藏佛師子呪神足遊王佛告須弥

登王佛法護佛金剛蔵師子遊戯佛寶

佛藥師琉璃光佛普光功德山王佛善住功

德寶王佛六方六佛名号東方寶光月

殿妙尊音王佛南方樹根華王

王神通艶華王佛北方月

□ 精進寶 □ 佛 (以下闕)

本、大正蔵本に共通する要素であり、後世の増広によるものと判断した。

9 Jx01592 本 (表 9) ロシア科学院東方研究所サンクトペテルブルク分所蔵敦煌文書 Jx01592 『高王觀世音

(表 9) Jx 01592 本

□□□□音經一卷

□□□□度苦難拔除生死罪觀世音普

薩南无佛佛□□□□法有常樂我緣佛

說南无摩訶般若□□□□是大神呪佛說摩

訶般若波羅蜜是七等□□□□佛□

□佛師子吼神足遊王佛高須弥燈王佛□

□佛金剛藏師子遊戲佛藥師瑠璃光佛普

□□德山王佛□□□寶王佛六方六佛

□□東方寶光月殿妙尊音□佛南方樹□

華王佛西方造王神通燦華王佛北方月殿

清淨佛上方无量精進佛下方普觀月音王佛

釋迦牟尼佛弥勒佛中央一切衆□在於王

界中行在於地上及以虚空裏慈愛於一切令各安隱休息晝夜脩持心常應誦念

此偈消伏於毒害

高王觀世音經

(* 弁 * 主)

經』無紀年

經字数 236・仏名数 17

首題以下前半に破

損による欠失あり。

①「南无摩訶般若波

羅蜜是…呪」の繰返

し

「摩訶般若波羅蜜」

と作る点は房山第三

洞本と共通である

が、その三種併記の

第二種を欠き二種の

みにする点、後半の

「南无」を「佛説」

と作る点、粗悪な粗

本を底本にしたもの

か。

②「无量精進佛」

諸本は「无数精進寶首佛」と作る。やはり粗悪な底本が原因か。

③「中央」

東魏本⑥参照。特異な異同である。

④「晝夜脩持心」

「持」字が唐高宗の忌諱。

高宗即位の貞觀二三年

(六四九年)以降の写本で

あることは確定する。

10 甘肅省博物館本 (表

10) 甘肅省博物館藏敦煌

文書甘博 016 G 所収『佛

説觀世音經』完本

經字数 176・仏名数 19

十五葉の折本に収める八

經の一經。最初の「勸善經」

の末尾に「貞元拾玖年廿三

日下」との題記がある。従っ

て貞元一九年(八〇三年)

受持讀誦千遍得度苦難拔生死

罪觀世音菩薩南无佛佛国有

緣佛法相常樂我緣佛

南无摩訶般若波羅蜜是無

等等呪光秘寶佛法藏佛

師子呪神足幽王佛告須弥登

王佛法護佛金剛護師子遊

戲佛寶勝佛藥師瑠璃光佛

普光功德山王佛善住功

寶王佛六方六名号東方寶光

王佛六方六佛妙尊音王佛南

无樹根花王佛西方造王神通

華佛北方月殿清淨佛上方?

數精進寶手佛下方善觀月

音王佛釋迦牟尼佛弥勒佛

中因一切衆生在土界中者於

地上及以虚空裏慈愛於一切令

各安隱休息晝夜脩治心常

求誦此偈消伏於毒害

佛説觀世音經一卷

(* 弁 * 主)

かそれ以降の書写である。

① 「南无摩訶般若婆羅蜜是無等等呪」

「波羅蜜」が加わった表現。三種併記のはずが、最後の「無等等呪」のみとなっている。煩瑣であったため省略されたのか、書写の際にうっかり飛ばしてしまったのか。

② 「金剛護師子遊戲佛」

他本の多くが「金剛藏」としている所を「金剛護」としており、特異な異同。

③ 「寶勝佛」 Jx00531本に共通する唐代の増広。

④ 「東方寶光明殿清淨佛、妙尊音王佛」

諸本が「東方寶光月殿妙尊音王佛」と作る仏名を、「清淨佛」という表現を挿入し、二つの仏名に作る。以下に現れる「北方月殿清淨佛」と混同した誤記と思われる。

⑤ 「南无樹根花王」 諸本は「南方」。誤記であろう。

⑥ 「晝夜脩治心」

高宗の没年以降の唐代の書写でありながら唐高宗の諱を避けていない。祖本が避諱せず、かつ該本が公開を想定しない、私的なものであったためであろう。

◎まとめ

どのような姿勢、目的の写本かは不明であるが、以上の如く極めて杜撰な写本といえる。

結論

以上、唐代に至る高王経の諸本を検討した。特にマントラ名としての般若波羅蜜を繰返す部分、「金剛師子遊戲仏」なる仏名、経後半の「晝夜脩慈心」等に少しづつ変質が生じるものの、増広については、唐以降に現れた「宝勝仏」以外見えないことが分かった。

その中で東魏本は題記こそ最も古い、テキストは特異で校勘の杜撰なことが改めて確認できた。

それに対し、アジア美術館本は無紀年であるため年代こそ明確にはできないものの、その特徴を確認すると、石刻時期は北魏後期を含む南北朝時代にまで遡り得るものであることが分かった。またトルファン本はアジア美術館本と同系統で、内容・字体ともに隋代頃まで遡れ、アジア美術館本を補う価値があることが再確認できた。

以上より、本経の成立年代や制作意図を検討する際には、アジア美術館本を底本に一部トルファン本で補ったもので行うべきだということが確認できたのではないだろうか。

参考文献 (著者の五十音順)

池田温 (一九九〇) 『中国古代写本識語集録』 (大蔵出版)

池田証寿 (二〇一〇) 『寂』の異体—HNGによる考察— (訓

点語と訓点資料第二二七輯)

石塚晴通(二〇〇九)『漢字字体規範データベース(HNG)―敦煌写本の位置―』(土肥義和編)『敦煌・吐魯番出土漢文文書の新研究』(東洋文庫)所収

同他(二〇〇五)『資料・情報』漢字字体規範データベース(日本語の研究第一巻第四号)後に石塚編(二〇一二)所収

同編(二〇一二)『漢字字体研究』(勉誠出版)

上村真肇(一九五四)『普門品漢訳偈頌の添加について』(印度学仏教学研究第二巻第二号)

王振国(二〇〇六)『龍門石窟与洛陽仏教文化』(中州古籍出版社・龍門石窟研究文集)

大友信一・西原一幸(一九八四)『唐代字樣』二種の研究と索引』(桜風社)

大村西崖(一九一七)『中国美術史彫塑篇』(一九八〇・図書刊行会復刻)

郭瑞(二〇一〇)『魏晉南北朝石刻文字』(南方日報出版社)

兜木正亨編(一九六八)『敦煌法華經概説』(スタイン・ペリオ蒐集敦煌法華經目録)(靈友会)

菅野博史(一九九二)『光宅寺法雲』『法華義記』と敦煌写本『法華義記』との比較研究』(印度学仏教学研究第四〇巻第一号)

北村一仁(二〇〇八)『南北朝後期潁川地区の人々と社会―石刻史料を手がかりとして―』(龍谷史壇・第二一九号)

桐谷征一(一九八七)『房山雷音洞石経攷』(『仏教史仏教学論集』野村耀昌博士古稀記念論集)(春秋社)所収

桐谷征一(一九九〇)『偽経高王觀世音経のテキストと信仰』(法

華文化研究第十六号)

上海古籍出版社編(二〇〇三)『法藏敦煌西域文獻』³⁰⁾ 臧克和(二〇一〇)『中国石刻叢書』前言』(魏晉南北朝石刻文字)(南方日報出版社)所収

田村俊郎(二〇一一)『中国南北朝時代における『高王觀世音経』とその展開―サンフランシスコアジア美術館所蔵経碑を手がかりに―』(東方宗教第一一八号)

段文傑主編(一九九九)『甘肅藏敦煌文獻』第四卷(甘肅人民出版社)

中国國家圖書館編(二〇〇六)『國家圖書館藏敦煌遺書』¹⁶⁾(北京圖書館出版社)

中国仏教協會編(一九七八)『房山雲居寺石経』(文物出版社)

同他編(二〇〇〇)『房山石経』隋唐刻経1(華夏出版社)

張雪芬(二〇〇五)『河南博愛渠青天河峡谷新發現北魏摩崖觀世音像』(華夏考古二〇〇五年第一期)

張綏(二〇〇二)『説不尽的觀世音―引経・掇典・図説』(上海辭書出版社)

同(二〇〇六)『高王觀世音経』刻写印諸本源流』(李振剛主編)『二〇〇四年龍門石窟國際學術研討會文集』(河南人民出版社・龍門石窟研究文集)所収

同(二〇一〇)『觀世音』《高王経》并心化像碑―美国哥倫比亞大学藏沙可樂捐觀音経像碑』(世界宗教文化二〇一〇年第三期)

常盤大定(一九三八)『後漢より宋齊に至る譯經總録』(東方文化學院東京研究所)

- 中田篤郎編（一九八九）『北京図書館藏敦煌遺書絵目録』（朋友書店）
- 西原一幸（一九八一）『顔氏字様』以前の字様に「て」（金城学院大学論集国文学篇第24号）後に大友・石原（一九八四）所収
- 藤枝晃（二〇〇五）『トルファン出土仏典の研究―高昌残影釈録』（法蔵館）
- 布施浩岳（一九三五）『提婆品真諦訳出説考』（仏誕二千五百年記念学会編『仏教学の諸問題』岩波書店所収）
- 牧田諦亮（一九六七）『疑経研究』（京都大学人文科学研究所）第七章「高王観世音経の出現」
- 安岡孝一（二〇一二）『拓本データベースの設計とその応用』（石塚編（二〇一二）所収）
- 李玉珉（二〇〇二）『南北朝観世音造像考』（邢義田主編『第三屆国際漢学会議論文集歴史組中世紀以前的地域文化、宗教与芸術』（中央研究院歴史言語研究所）所収）
- 李小栄（二〇〇三）『高王観世音経』考析（敦煌研究 二〇〇三第一期）
- 劉淑芬（二〇〇六）『中国撰述經典与北朝仏教的伝布―從北朝刻経造像碑談起』（『簡牘学報第十九輯勞貞一先生百歳冥誕紀念論文集』所収）
- 俄羅斯科学院東方研究所聖彼得堡分所他編（一九九六a）『俄藏敦煌文獻』⑥（上海古籍出版社）
- 同（一九九六b）『俄藏黑水城文獻』②④（同出版社）
- 同（一九九七）『俄藏敦煌文獻』⑧（同出版社）

Swergold, Leopold (2009) "Treasures Rediscovered: Chinese Stone Sculpture from the Sackler Collection at Columbia University", Miriam & IRA D. Wallach Art Gallery, Columbia University in the City of New York.

注

- (1) 大正藏第85冊一四二五頁b。大日本統藏経所収本。韓国光武二年（一八九八年）刊本で対校し校勘記を附す。
- (2) 例えば、李小栄（二〇〇三）は「東方寶光月殿妙尊音王佛」以下の六仏名の出典として失訳「仏説不思議功德諸仏所護念経」を挙げる。これら六仏は竺法護訳「仏説宝網経」にも見える（大正藏第14冊八〇頁a）
- (3) 張絵（二〇〇二）が、東魏本の存在に言及した最初の文献。李玉珉（二〇〇二）は、南北朝の観世音造像を検討する中でアジア美術館本の存在を紹介する。李小栄（二〇〇三）は、P3920本を底本に房山本（第三洞本と思われる）²⁾、IK00531本、黒水城 TK117・TK118本、大正藏本を対校し、時代が下るに従い経の内容も簡から繁へ変化すると述べる一方、東魏本については張絵（二〇〇二）を引き最古のものとして存在に言及するのみである。王（二〇〇六）は、古本と今本の二種の存在が既知であるとしつつも、なぜか古本とする龍門老龍洞本を今本の大正藏本と対校する。劉（二〇〇六）は造像刻経碑に見える中国撰述經典を検討する中で、東魏本が最も古いものとし、東魏本・アジア美術館本（隋代のものと思なす）・永淳元年阿弥陀仏造像刻経碑本（筆者未見）・房山本を比較、東魏

から唐初のテキストは「消伏于毒害」で終わる点で基本的に同一とする。張総(二〇一〇)はコロンビア大学本を東魏本と対校。

- (4) 桐谷(一九九〇)は、ジャイルズ目録が西暦六〇〇年頃とすること、「高王経の源流」という観点を傍証に、「七世紀以前に遡ることが可能」とする。

- (5) 阿氏はロシア藏敦煌文書 *Ms.01591* 所収「救苦観世音経」本には言及していない。直前にある「般若波羅蜜多心経」巻一は法成訳と思われる(但し大正藏所収本とは文字の異同あり)、書写年代は九世紀半ば以降である。該写本は依然地獄での救済を含み、十句観音経とは大きく異なる。

- (6) 以下は宋代以降のものと考え、検討対象から外した。

・ロシア藏黒水城(カラホト)旧西夏国遺跡出土文献 折本写本 TK70、刊本 TK117、TK118、折本刊本 TK183 の四本が確認できる。俄羅斯科学院他(一九九六) TK70: ②九一頁、TK117・TK118: ③三六―四〇頁、TK183: ④一五三―四頁。いずれも無紀年。これらは宋代に成立した西夏国が中国から収集した文献と考えられる。TK118 は経文字数 454・仏名数 26〔過去七仏〕等それぞれ一仏と計算で仏名のほか陀羅尼、偈文等を挿入追加。TK117 は経文字数 471・仏名数 26 で更に菩薩名を挿入する。

・P3920 本 前述の如く桐谷(一九九〇)により録文が初めて紹介された折本。無紀年。黒水城諸本とはほぼ同一の大幅な増広がなされる。上海古籍出版社編(二〇〇三)一六〇頁。経字数は 456・仏名数 26。TK118 とほぼ同一。

- (7) 経文字数は東魏本の経文(「仏説」)「毒害」を基準に数えた。尾欠本については経文字数と仏名数とも東魏本との比較で「該本/東魏本」の如く示した。

- (8) 京都大学人文科学研究所所蔵石刻拓本資料(以下京大拓本) *hand05b* を底本に、「魯迅輯校石刻手稿(以下魯迅)・造象第 2 冊」四七八―九頁の録文も参考にした。尚北村(二〇〇八)注 63 が指摘の通り、京大拓本や「北京圖書館藏歷代石刻拓本匯編」は整理に不備があり、該「高王経」巻一を「杜照賢十三人等造像記」の項に含める。尚魯迅の整理の正しさは大村(一九一七)二七九頁でも確認可。

- (9) 京大拓本 *hand048b*。

- (10) 大正藏第 71 冊五五二頁。張総(二〇一〇)が初めて指摘した。治病を目的として発せられたパリッタ。ラターナ・スートラの冒頭の漢訳である。

- (11) 大正藏本は「佛世界」、P3920 本は「此土界」と作るが、唐代以前の古本は該本を除き全て「土界」。桐谷(一九九〇)は各本の録文を紹介した際、誤って全て「世界」とし、田村(二〇一一)も房山二本の録文を誤る。

- (12) 魯迅・造象第 2 冊四七八―九頁の録文に従う。

- (13) 田村(二〇一一)注 41 参照。

- (14) 拓本 DB (<http://coe21.zinbun.kyoto-u.ac.jp/djvuchar/>) は安岡(二〇一一)を HZG (<http://www.joao-roiz.jp/HNG/>) は石塚(二〇〇九)、同他(二〇〇五)を参照。後者は異体率の低い敦煌文書等を選び、中国文献の南北朝から南宋の規範字体を検索可能にしたものである。尚本論の「字形」

- 「字体」という用語の定義は同(二〇一二)二頁に従った。
- (15) 臧(二〇一〇)八頁参照。
- (16) 石原(一九八二)。
- (17) この箇所影印は大友他(一九八四)二六頁。
- (18) 図の字形は題記は京大拓本 *man046b*、高王経は同 *man046a*、魯迅は造象第2冊四七九頁より抜粋した。
- (19) 以下(刻経A)〜(刻経D)なる呼称は田村(二〇一一)による。本研究に際し、田村俊郎氏から版本画像の提供を受け、改めて録文を作成した。田村氏にはこの場を借りて厚く御礼を申し上げたい。
- (20) 田村(二〇一一)七、一〇頁。添品妙法蓮華経の観世音普門品は「第二十四」だが重誦偈が附加されている。
- (21) 張総(二〇〇六)六四八頁。田村(二〇一一)七頁は該碑には紀年・題記はなく詳細な年代は不明と報告する。筆者は該北京大学図書館拓本が未見であるが、田村氏から提供を受けた該本の鮮明な写真に題記は見出せない。
- (22) 編纂年代はやや下ると思われるが、「現在十方千五百仏名並雜仏同号」なる敦煌出土仏典には「金剛師子遊戯佛。善住功德寶王佛。普光功德山王佛。」(大正藏第85冊一四四九頁b)と列挙されており、やはり「金剛」と作る。
- (23) 郭瑞(二〇一〇)二二九頁。
- (24) 梁天監五年(五〇六年)に荊州竹林寺に寄進の、スタン本唯一の南朝紀年²²⁾も「冢」を用い、南朝でも使用されていた字体である点を指摘する。
- (25) 拓本DBは誤って「冢」と釈読する。鳩摩羅什訳『維摩詰所説経』仏国品の残石で、隋代年代不明とされている。(26) 京大拓本 *su098x*。先天二年(七二三年)の紀年がある。唐代としては古風な字体の石刻である。
- (27) この箇所影印は大友他(一九八四)三二頁。
- (28) 「東方快樂仏」は、竺法護訳「仏説八陽神呪経」(大正藏第14冊七三頁b)に見える東方現在の「快樂如来」か。
- (29) 兜木(一九七八)。上村眞隆(一九五四)六七〜九頁は重誦偈のみに論を絞るが重要な論点を提示する。
- (30) 中田(一九八九)奥書一七頁でも題記は「MFでは見えず」とする。
- (31) 常盤(一九三八)図版三・八六三〜四頁は提婆達多品挿入に関わる、旧小川廣巳氏(現文化庁)蔵「法華経卷第六残巻」題記を紹介する。それには「…其提婆達多品、是上定林寺獻統法師干闥國將來、以齊永明八年十二月、於瓦官寺、與外國僧法意法師譯之、即依正法華經次比爲第十二品。」と法意本が訳出と共に妙法蓮華経に挿入されたと記すが、諸経録と合わない。池田温(一九九〇)はこの写本を七世紀頃のものとするので、後世の伝承と見なしておく。
- (32) 菅野(一九九一)による。
- (33) 『続高僧伝』卷五(大正藏第50冊四六四頁b) c)
- (34) 『妙法蓮華経文句』卷八・釈提婆達多品「陳有南嶽禪師。次此品在寶塔之後。」(大正藏第34冊一一四頁c)
- (35) 尚普門品を「第二十四」とする実例は、他に管見では以下の五例が挙げられる。
- ・青天河北魏摩崖石刻観世音菩薩普門品(河南博愛県)普

門品第二十四の抜粹。永平二年（五〇九年）題記あり。張雪芬（二〇〇五）参照。

・敦煌文書 S2105 妙法蓮華經卷十（敦煌宝藏一六冊・一七二頁）北魏永興二年（五三三年）題記あり。普賢菩薩勸發品が「第二十七」となっており、普門品は欠失するが、「第二十四」であったことになる。

・北魏王永福刻・妙法蓮華經觀世音普門品第二十四碑（京大拓本 han0820a~d）題記、紀年未詳。

・李崇貴兄弟等造經象碑（魯迅・造象第三冊（六九七）七〇六頁）題記は北齊天保十年（五五九年）。魯迅の解題は河南輝県出土とする。

右四本の「觀」字は、アジア美術館本と同様、「觀」字体である。但し李崇貴兄弟等造經象碑は、冒頭に「觀」字体が混在。該碑は魯迅にしか見えず拓本がないが、魯迅は字形を極めて忠実に記録しており、この混在は該碑に存在したものであろう。前述の如く「觀」字体は北齊頃から見え始める字体であり、アジア美術館本が該碑よりも古いものとの推定の傍証になる。

・敦煌文書北一五九四二・妙法蓮華經卷十（敦煌劫余録）辰84・敦煌宝藏第九六冊・九六頁）無重誦偈の普門品の後半からの残卷で、品題部分は欠失するが、次の陀羅尼品が「第二十五」である。題記無し。但し「觀」字が「觀」（「觀」）字体のため、隋から初唐の写本と思われる。尚中国国家図書館（二〇〇六）「条記目録」は七〜八世紀の唐写本とする。

(36) 中国仏教協会他編（二〇〇〇）により録文を作成。

(37) 李玉昆（一九九八）二三四頁の録文、張綸（二〇〇六）の録文、王振国（二〇〇六）所収の写真・録文を、それぞれ参照した。紀年は写真では判読できなかったが、上記三資料がいずれも同様に釈読するので、それに従った。

(38) 中国仏教協会編（一九七八）、中国仏教協会他編（二〇〇〇）の図版を用い、桐谷（一九九〇）を参照した。

(39) Leopold (2009) 所収の写真と拓本、張綸（二〇一〇）の録文を参照した。

(40) Leopold (2009) の該經像碑の項を執筆した Eileen Hsiang-Ling Hsu 氏は、碑陰の地藏菩薩の図像や碑陽の五尊像の彫刻様式に基づけば七世紀のものとして推定されるが、高王經の隸書の混じる筆致と碑陽の祈願文のこなれた楷書の筆致を比較すると、高王經の碑文がより古く、唐初に補刻された北朝時代の石刻かもしれないとする（同書五三頁）が、その説は当たらない。

(41) 俄羅斯科学院他（一九九六 a）三四六頁

(42) 『仏祖統紀』卷40（大正藏第49冊三七五頁 c）には至徳元年（七五六年）に唐肅宗の夢に宝勝仏の仏名を誦する金色の僧が現れ、常に宝勝仏を念仏していた新羅の無漏、しばらくして不空が召見された故事が見える。

(43) 俄羅斯科学院他（一九九七）二四五（4）六頁

(44) 段文傑主編（一九九九）一四二頁

(45) 順に『勸善經』『仏説地藏菩薩經』『仏説摩利支天經』『仏説如來成道經』『仏説延壽命經』『仏説統命經』、該本、『仏説熾盛光大威德消災吉祥陀羅尼經』の八經。